厚別南

札幌市立厚別南中学校
学校だより　第11号
令和6年03月15日(金)

学校長式辞　　校長　市川 恵幸

新たな期待と不安を胸に、本校の門をくぐった三年前の入学式。「新型コロナ」という言葉が日常生活の中で定着し、「感染予防」という名の制限のもとで、十分な活動も保障されない日々が続きました。しかし、昨年５月８日に五類感染症に移行したことで、ようやく、少しずつですがコロナ前のような活動ができるようになりました。

移行してからちょうど二十日経過した５月２８日。２泊３日の日程で、東京、鎌倉方面への修学旅行がありました。それは、みなさんにとって、ワクワクとドキドキが混じり合った、思い出いっぱいの行事になったことと思います。私にとっては、特に最終日の、浅草演芸ホールから羽田空港までの徒歩と公共交通機関を使っての大移動が忘れられないというだけでなく、厚南の生徒を誇りに思う出来事として強く心に残っています。実際、観光客であふれかえっている浅草の街中を２００名近い中学生の集団が、しかも平日とはいえ一般客の多い電車に乗って移動することは、かなり難易度の高いものです。しかし、さすがは本校の三年生。隊列を大きく乱すことなく整然と進み、誰一人迷子になったり、電車に乗り遅れたりすることもなく、全員無事に空港に到着したのです。私は、皆さんの表情を見て安堵したのはもちろんですが、それ以上に、周囲に自慢したくなるほど、厚南の生徒を誇らしく感じました。

さて、先日行った道徳の授業は、「生きる」ことがテーマでした。その中で、「人生のコントローラーは他人に手放さない」ことや「自分の人生に、爪痕を残す」ということをお話ししました。また、「生きる」ことのすぐそばには「あかり」があることもお話しました。

ここで、授業の終わりに書いてもらった感想を紹介したいと思います。

〇*「生きる」ということ自体に意味があることはもちろん、「生きようと努力する」という過程にも意味があるのではないかと考えました。「生きようとする努力」は他人からはあまり見えないですが、自分の足跡（爪痕）を残すことになると思いました。*

〇*「生きる」のそばに「あかり」があることに驚いた。でもあかりがあれば必ず暗いところもあると思うので、自分が明るいときには、暗いところにいる人を支えられるようになりたい。*

ほかにも紹介したいものはたくさんあったのですが、なにより、皆さんが、「生きる」ことについて、自分事として真剣に考えてくれたことを嬉しく思っています。

皆さんの人生は皆さん自身のものです。皆さんが、もしこの３年間でやり残したことや後悔したこと、挑戦したいことや叶えたい夢や希望などがあれば、この先いくらでもチャンスはあります。そのチャンスを逃すことのないよう「鏡はいつも磨いておく」の言葉を心に留め、人生の主人公として、力強く一歩を踏み出しいってください。自分と未来はいくらでも変えられます。

本日の式歌では、本校のオリジナル合唱曲「見上げると」と「最終章へ」が歌われます。合唱引継集会でもお話ししましたが、仲間同士の「横糸」と、先輩から後輩へという「縦糸」を、合唱という「機織り機」で紡いだ布が、この晴れ舞台でどのようなものに仕上がるのか、とても楽しみにしています。ぜひ、皆さん一人ひとりの人生に爪痕を残す合唱にしてください。

最後になりますが、保護者の皆さま、お子様の卒業、おめでとうございます。また、林幹也ＰＴＡ会長様や出身小学校の校長先生をはじめとする来賓の方にも御臨席を賜り誠にありがとうございます。多くの保護者や来賓の方に見守られ、第三十六回卒業式を挙行できたこと大変嬉しく思っております。中学校の卒業は、義務教育九年間の卒業でもあるという大変重みのあるものです。その証となる卒業証書を手にしたお子さんの表情は、凛として、すがすがしく、輝かしい未来に向けた力強い歩みを感じさせるものでした。

これからも、新たなステージに立つお子様のよき理解者として、見守り支えていただきますようお願い申し上げます。今まで支えてくださいました多くの皆様と卒業生の皆さんの前途に幸多きことを祈りつつ、式辞といたします。

令和６年３月１５日

札幌市立厚別南中学校長　市川恵幸

PTA 会長祝辞　　PTA 会長　林 幹也

卒業生のみなさん、本日はご卒業おめでとうございます。

また、保護者のみなさま、お子様が立派に成長をされ、今日この日を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。そして、校長先生をはじめ先生方におかれましても、子どもたちを日々温かくご指導くださいましたこと、保護者を代表いたしましてここにお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

卒業生のみなさん。みなさんと同年代の張本美和さんがパリオリンピックの日本代表選手に選ばれたことはご存知でしょうか。

先日行われた世界卓球の決勝戦をテレビで見ていた人も多かったのではないかと思いますが、その中で、タイムアウト時にアドバイスを受けた張本選手が再びコートに戻る際、一度、卓球台に背を向けて振り返り、「ありがとうございます」と深々と頭を下げて感謝の気持ちを伝える様子は、卓球の実力もさることながら一人の人間として非常に素晴らしい方だなと思わずにはいられませんでした。世界卓球の決勝戦という大舞台なのですから、普通なら自分の試合のことで頭がいっぱいになっているはずなのに、仲間への感謝の気持ちを忘れない張本選手の姿勢は、私たちにとっても素晴らしいお手本となりました。

さて、卒業式を迎えたみなさんは今どんな気持ちでしょうか？卒業するって実感わいていますか？イメージしてください。今日で中学校生活は最後となります。３年間毎日通ったこの中学校。教室、先生方、そして同級生の仲間、みんなみんな今日でお別れです。いろいろなことがあったけどみんな本当にがんばりました。お互い「ありがとう」という気持ちを胸に、卒業を迎えたことを讃えあってください。

これから先の人生ではみなさんさまざまな場面に立たれることがあると思います。

どんな時でも感謝の気持ちを忘れず礼儀正しい姿勢を持ち続けていれば、きっと明るく輝く未来になるであろうと私は信じています。

どうかこのまま真っすぐ生きてください。みなさんの幸せを心から願っています。

令和６年３月１５日

札幌市立厚別南中学ＰＴＡ会長　林幹也

送辞　　在校生代表　木村 心菜

春うららかな陽気が感じられる季節になりました。今にも開こうとしている若葉は、皆さんの門出をお祝いしているかのようです。このような良き日に厚別南中学校を旅立たれる卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。在校生一同、心よりお祝い申し上げます。

今、先輩方との思い出を振り返ってみると、いつも私たちを優しく見守ってくださっていたことに改めて気づきます。希望と不安を胸に入学してきた一年前の春、新しい環境に慣れずに戸惑っていた私たちを常に前を向いて導いてくれた先輩方は私たちの憧れでした。今年度は新型コロナウイルスの五類移行により、様々な制限が緩和され、より自由な活動ができるようになりました。文化祭では、４年ぶりに全校生徒が体育館に入り、身体全体でパフォーマンスを楽しむことができました。その時も私たちを先立って楽しませてくれたのは先輩方でした。委員会や局会でも、話し合いが難航していた時に率先して意見を出し、私たちをリードしてくださいました。そんな先輩方に、私たちは何度も助けられました。先輩方と過ごした日常は、本当に、かけがえのない時間でした。しかし本日が先輩方と過ごすことのできる最後の日だと考えると、言葉にすることのできない寂しさがこみ上げてきます。初めて先輩方と出会った時は、小学校時代とは違う先輩方との接し方がわからずに、あまり積極的に会話することができず、話す時も、どこか距離を置いてしまっていました。しかし、いつも優しく笑顔で話しかけてきてくださった先輩方のおかげで、自然と笑顔になることのできる機会が増え、普段の学校生活においても、今まで以上に楽しむことができるようになりました。改めて本当にありがとうございました。月日が経つのは早いもので、そんな先輩方はもう卒業し、４月からは私たちが最高学年となります。先輩方が継承して下さった「厚南３＋１」や「見上げると」、その他たくさんの伝統を守りながら進化させ、後輩たちにつなげていきます。今まで、私たちは、先輩方の後ろ姿を追うばかりでした。けれど、皆さんはこれから、それぞれ新たな道へと進んで行ってしまいます。よって、これからは私たちが先輩方から学んだことを糧に、よりよい学校を創っていけるよう、挑戦心を持って様々なことに取り組んでいきます。

４月から生活が一変することに、不安をもつこともあるかもしれません。またこれから進んで行く道は、楽なものばかりではなく、迷ったり、つまずいたりすることもあるかと思います。そんな時は本校

で過ごした３年間を思い出してください。乗り越えてきたこと、笑い合った日々、悩んだ事やみんなで過ごしたかけがえのない日々。この厚別南中学校で経験したことがきっと皆さんの心のよりどころになってくれると信じています。
　最後になりますが、新たな道へ一歩を踏み出す先輩方の前途が希望に満ち溢れたものでありますように祈念し、送辞とさせていただきます。

　令和６年３月１５日

在校生代表　木村心菜

答辞　　卒業生代表　津田 若菜

　あたたかい光と優しい春風に包まれながら、今日、私たちはこの厚別南中学校を卒業します。本日は、私たちのために、このように華やかな卒業式を開いていただき、ありがとうございます。また、お忙しい中ご臨席いただきましたご来賓の皆様、先生方、保護者の皆様、在校生の皆さん、卒業生一同心より御礼申し上げます。
　怒涛の３年間を走り抜け、私たちは今日卒業の日を迎えました。期待と不安を抱えつつ厚南に入学した３年前から始まった中学校生活。振り返ると本当にあっという間で、たくさんの思い出が頭の中を駆け巡ります。
　３年前の４月、私たちは厚別南中学校に入学しました。まだ大きかった制服に袖を通し、新しい仲間・先生・校舎、すべてのものが新鮮に見えていたあの頃。リモート授業、ジャージでの登校、マスクの着用が当たり前で、今着ている制服を着る機会はあまり多くありませんでした。予定通りにできない行事も多くありましたが、１年生のときには先生方のお陰で、行くことができなかった校外学習のかわりにパラスポーツ体験を行えました。普段の生活ではできないような経験をすると共に、これからの多様な社会について考えることができました。
　中学校にも、特殊な生活にも慣れてきた２年生。後輩が入ってきて、「先輩」と呼ばれるのが嬉しかった反面、より一層自分たちだけでなく周りのことも考えなければならなくなりました。特に後期は３年生から様々なことを引き継ぎ、「学校を引っ張っていく学年」として責任を持って行動することを学びました。
　まだ制限も残る中で行った宿泊学習では、ルスツリゾートで遊んだことが印象的です。なるべく多くのアトラクションに乗るために走ったり、アイスを買うために走ったりしました。学年レクでは、まだできることが限られていましたが、紙飛行機大会、プランク大会など、個性あふれる企画で楽しむことができました。
　また、ようやく合唱ができるようになり、あつおん！という行事が生まれました。右も左も分からない中、３年生の先輩方の、真剣さと楽しさを持ち合わせたステージに圧倒され、来年は自分たちがこの立場であることに少し不安も覚えました。合唱引き継ぎ集会でも、合唱に対する思いや熱意が深く伝わってきました。
　全ての物事に「最後」の二文字が付くようになった３年生。最高学年として、言葉だけでなく背中で語れと言われることも増えた一方で、自分たちの思い出を作ることも大切にした１年でした。
　東京や神奈川に行った修学旅行では、３日間では足りないほどの経験と思い出を作ることができました。眠い目をこすりながら朝早くに集まった１日目。スカイツリーの自由見学で東京を一望したあとは、横浜中華街で夕食をとりました。鎌倉で自主研修をした２日目。友達と美味しいものを食べ、お土産を買い、江ノ電に乗ったり、大仏を見たり、夜は学年レクで盛り上がったりしました。札幌への帰り道が見えてきた３日目。浅草演芸ホールでは、漫才や紙切り、落語を楽しみました。満員の地下鉄に乗って行った羽田空港でも、たくさんお土産を買い、東京を惜しみながらも札幌に無事帰ってきました。制限も少なく、自由に、思いきり楽しむことができた修学旅行でした。スカイツリーから見たあの景色、自主研修でたくさん歩き疲れ果てたこと、ホテルの部屋で先生に怒られたこと、友達と笑い合ったこと。その全てがとても大切な思い出です。
　陸上競技大会の代わりに行った学年スポーツ大会は、大声で応援できるようになったおかげか、とても熱い行事となりました。どの種目も白熱した試合が繰り広げられ、試合が終わるごとに「お疲れ様」や「次頑張ってね」という言葉が飛び交っていたのを思い出します。仲間と協力し、声援を送りあえることへの喜びを感じながら、全力で楽しみました。
　リモートが当たり前だった文化祭は、今年度、４年ぶりに全校生徒と保護者の方々が一緒に会場で楽しめるものとなりました。準備期間中、だんだんと出来上がっていく装飾やパフォーマンスは、間違い

なく全校生徒の努力の結晶であり、準備や当日が終わった後の達成感はとても大きかったです。会場にいる全員が経験したことのない形式で、始まる前の緊張は大きかったですが、大いに盛り上がり、感動もひとしおでした。

今年度のあつおん！では、各学年、各クラスの個性が光った合唱が披露されました。学年を超えた交流もでき、まさに、合唱を引き継ぐことができているような気がします。一緒に練習してくれた１、２年生の皆さん、本当にありがとうございました。私たちは去年の先輩方のようにできていたのか。その答えはわかりません。しかし、私たちなりに伝統を守ってきたつもりです。在校生の皆さん。全力で合唱に取り組んでみてください。

こうして振り返ると、３年間の中学校生活は本当にあっという間でした。入学や進級直後の緊張に溢れた教室。行事に向けて、時にはぶつかりながら仲間と協力した毎日。友達や先生と交わした他愛もない会話。今はその全てが、大切な思い出だと実感しています。

時代の変化を目の当たりにしてきたこの３年間。行動の制限が多く、入学前に見学に来ることもできず、行事の中止や変更を余儀なくされることもありました。その度に、やるせなさや苛立ちを感じ、諦めそうになることも何度もありました。しかし、学年が上がるごとにできることは少しずつ増え、新しい日常や行事の在り方を模索する日々。中学校に入学してから私たちが経験してきた行事はコロナ禍以前とは全く異なるものでした。それまでの「普通」が分からず戸惑うことも多かったです。それでも、この３年間は確実に光に向かって、一歩一歩進んだ日々だったと私は思います。先行きが分からないこの時代を中学生として生きたからこそ、得られた経験はとても多いです。これから私たち卒業生は、別々の道に進み、遠く離れた場所に行ってしまうかもしれません。そして、これから先も何が起こるかはわかりません。とても大きな困難が待ち受けているかもしれません。でも、ここで過ごした日々は変わらず、消えず、残り続けます。この校舎で仲間とともに学び経験したことを種として、一つずつその種をまき、そこから出てくる芽を大切に育て、卒業した後も成長させ続けます。

在校生の皆さん。迷うことも多かった私たちについてきてくれてありがとうございました。皆さんのおかげで、たくさんの楽しい経験をすることができました。４月にはそれぞれの学年が進級して、新しい仲間に出会います。環境が変わり、思わぬ困難や壁にぶつかることもあるかもしれません。しかし、その度に「試練は自分が成長できるチャンスだ」と思って、果敢に挑戦してください。結果がどうであれ、努力したこと、立ち向かったことは、絶対に自分の糧になります。これからも頑張ってください。応援しています。普段は優しく、時に厳しく、私たちにご指導してくださった先生方。３年間、本当にありがとうございました。ご心配やご迷惑をたくさんおかけしたと思いますが、一人ひとりに真摯に向き合い、悩んでいるときは相談に乗ってくれました。先生方に教わったことを心に留め、新しい道を進んでいきたいと思います。そして、いつも一番近くで見守ってくれた保護者の皆様。私たちのことを一番心配し、一番考え、つらい時には励ましてくれました。嬉しい時には一緒に喜んでくれました。これからもきっとたくさん心配をかけると思いますが、どうか、これからもよろしくお願いします。最後になりますが、今まで私たちに関わってくださった全ての人に心からの感謝を申し上げ、答辞とさせていただきます。

令和６年３月１５日

卒業生代表　津田若菜